

## シェイクスピア劇の材源と改作に関する翻訳プロジェクト研究

著者	大和 高行
別言語のタイトル	A Study of the project of translation, introduction and annotating the sources and adaptations of Shakespeare's plays
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/14559">http://hdl.handle.net/10232/14559</a>

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月10日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520232

研究課題名（和文）：シェイクスピア劇の材源と改作に関する翻訳プロジェクト研究

研究課題名（英文）：A Study of the project of translation, introduction and annotating the sources and adaptations of Shakespeare's plays

研究代表者：大和 高行 (YAMATO TAKAYUKI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：30253371

研究成果の概要（和文）：平成20年度から平成23年度までの4年間の研究期間において、以下のような具体的な成果を得ることができた。1. シェイクスピア劇の材源と改作に関連するテキストの拡充作業を進めた。2. ウィリアム・ペインター作「ナルボンヌのジレット」、ロミオとジュリエッタ」、ジョン・レイシー作『スコットランド人レイシー』、コリー・シバー作『リチャード三世』、バーナード・ショウ作『シンベリン』仕上げ直し』の注釈・改題付き翻訳を印刷発表した。3. 本研究課題に関する学会発表ならびに論文発表を行った。

研究成果の概要（英文）：This research project, carried out for the period of four years from 2008 to 2011, obtained the substantial results as specified below:

1. The project members gathered reliable academic editions of the sources and adaptation of Shakespeare's plays. 2. Japanese translations of William Painter's "Giletta of Narbonne", "Romeo and Julietta", John Lacy's *Sauny the Scot*, Colley Cibber's *Richard III*, Bernard Shaw's *Cymbeline Refinished*, with introductions and annotations., are published. 3. The project members read papers on related topics at academic conferences and published them in academic journals.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米、英語圏文学

キーワード：英文学、翻訳

## 1. 研究開始当初の背景

坪内逍遙のシェイクスピア全集をはじめ、わが国における英国ルネサンス期演劇テクス

トの訳出はかなり進んでいる。即ち、筑摩書房から刊行された『エリザベス朝悲劇集』（1974）及び『世界文学大系』、中央書院から

刊行された『エリザベス朝初期悲劇喜劇集』(1981)、早稲田大学出版部から刊行されたエリザベス朝喜劇10選シリーズ1及び2に代表されるように、シェイクスピアを中心とする劇作品の翻訳がたくさん出版されている。他方、シェイクスピア劇の材源ならびに改作に関する翻訳は非常に手薄である。たとえば、『タイタス・アンドロニカス』の材源の一つであるジャスパー・ヘイウッドの『テュエステス』は、セネカの原典の翻訳はあるものの、英訳からの翻訳がない。また、『終わりよければすべてよし』などいくつかのシェイクスピア作品との関連がしばしば指摘されるペインターの『快樂の宮殿』の翻訳もない。さらに、王政復古期のシェイクスピア劇の改作として知られる『じゃじゃ馬馴らし』、『あらし』、『リア王』、『リチャード3世』の翻訳もない。

英米においては王政復古期におけるシェイクスピアの改作テキストに関心が高まっているのに比して、研究開始当初、わが国においては、上述のように翻訳すらおぼつかない状況であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、シェイクスピア劇とその材源ならびに改作との比較研究において利便性の高い注釈付翻訳書の公刊を目指すことで、シェイクスピア研究の更なる発展にとって必要な基礎的資料を広く公に提供することを目的とするものである。本邦初訳を公刊することにより、英米で関心が高まっているシェイクスピア劇とその材源との関係を解明する研究ならびにシェイクスピアが後の時代にどのように受容されたかを解明する研究を、わが国においても大いに促進することができる。

## 3. 研究の方法

本研究では、月に一度の頻度で鹿児島大学法文学部と研究室において例会を開き、シェイクスピアの材源と改作に関する作品の訳出を進めていった。すなわち、研究メンバーはそれぞれの持ち回り担当箇所をメールで事前に配信し、例会当日は参加メンバー全員が、訳は正確か、日本語表現として十分にこなれていて、台詞としての通りがいいか、などの点に注意しながら、忌憚のない意見を相互に出し合っていた。また、訳出作業と並行して、シェイクスピアの材源と改作に関するテキストを拡充することと、本研究課題に関わる成果を学会発表ならびに論文発表で公にすることに努めた。

## 4. 研究成果

平成20年度から平成23年度までの4年間の研究期間において、シェイクスピア劇の材源と改作に関連するテキストの拡充作業を

進めるとともに、ウィリアム・ペインター作「ナルボンヌのジレットタ」、「ロミオとジュリエッタ」、ジョン・レイシー作『スコットランド人レイシー』、コリー・シバー作『リチャード三世』、バーナード・ショウ作『シンベリン』仕上げ直し』の注釈・改題付き翻訳(その多くが本邦初訳)を印刷発表した。また、研究代表者と研究分担者とで本研究課題に関する学会発表を計17件、論文発表を計18件行い、研究成果の一部を積極的に公にするよう努めた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計18件)

- ①大和高行「シェイクスピアの材源と改作に関する研究と翻訳の現在」、『平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 1-4.
- ②大和高行・丹羽佐紀・小林潤司・山下孝子・杉浦裕子(共訳)「コリー・シバー作『リチャード三世』」、平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 5-74.
- ③山下孝子(訳)「バーナード・ショウ作『シンベリン』仕上げ直し」、平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 75-91.
- ④大和高行「コリー・シバー作『リチャード三世』——解説——」、『平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 93-101.
- ⑤山下孝子(訳)「バーナード・ショウ作『シンベリン』仕上げ直し——解説——」、平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 103-105.
- ⑥杉浦裕子「ノヴェルの女性と舞台の女性——ウィリアム・ペインターの『快樂の宮殿』とエリザベス朝演劇——」、平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 109-120.
- ⑦丹羽佐紀「‘The Moor’から‘Ohtello’へ——Chinthioの作品とOhtelloの比較を中心として」、平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 121-130.
- ⑧大和高行「18世紀初頭における『リチャード三世』の改作——英国歴史劇の変容——」、『平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 131-138.
- ⑨小林潤司「シバーからケンブルへ——越境する改作研究の可能性」、『平成20年度～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研

究成果報告書』、査読無、2012、pp. 139-146.

- ⑩ 山下孝子 「“When shall I hear all through?”——『シンベリン』の終わり方を巡って」、『平成 20 年度～23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』、査読無、2012、pp. 147-155.
- ⑪ 丹羽佐紀 「『ロミオとジュリエット』におけるロレンス修道士と薬屋の関係をめぐって——二人の役割の同質性とその宗教的背景——」、『英文学研究 支部統合号』（日本英文学会）、査読有、第 4 巻、2012、pp. 385-392.
- ⑫ 大和高行 「コリー・シバー作『リチャード三世』におけるアン求愛の場面の劇作法」、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要『地域政策科学研究』、査読有、第 8 号、2011、pp. 211-226.
- ⑬ 小林潤司 「監禁と解放の劇場——『第二の乙女の悲劇』のダブルプロット構造の再検討」、『英文学研究 支部統合号』（日本英文学会）、査読有、第 3 巻、2011、pp. 459-472.
- ⑭ 杉浦裕子・大和高行・小林潤司・山下孝子・丹羽佐紀 「ウィリアム・ペインター作『ロミオとジュリエット』論——翻訳と解説」『鳴門教育大学研究紀要』、査読無、第 26 巻、2011、pp. 258-286.
- ⑮ 大和高行・小林潤司・杉浦裕子 「ジョン・レイシー作『スコットランド人ソーニイ』論」、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要『地域政策科学研究』、査読有、第 7 号、2010、pp. 19-86.
- ⑯ 大和高行 「John Lacy, *Sauny the Scot* (1667) にみる新たな喜劇性——イングランド、スコットランド、そして「インド」——」、鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』、査読無、第 69 号、2009、pp. 25-39.
- ⑰ 小林潤司 「「助言文芸」の衰退とトマス・ワイアットの詩：グレッグ・ウォーカーの『暴政のもとで書く』をめぐって」、鹿児島国際大学紀要『国際文化学部論集』、査読無、第 9 巻第 4 号、2009、pp. 193-209.
- ⑱ 杉浦裕子・大和高行・小林潤司・山下孝子・丹羽佐紀 「ウィリアム・ペインター作「ナルボンヌのジレット」論」、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要『地域政策科学研究』、査読有、第 6 号、2009、pp. 25-39.
- ⑲ 杉浦裕子 “Iago’s Entanglement with Modernity” 『英文学研究 支部統合号』（日本英文学会）、査読有、第 1 巻、2009、pp. 395-411.

〔学会発表〕（計 17 件）

- ① 小林潤司 「書評：Linda Woodbridge, *English Revenge Drama: Money, Resistance, Equality* (Cambridge UP, 2010)」、関西シェイクスピア研究会例会（於 大阪学院大学）、2012 年 2 月 26 日。

- ② 大和高行 「王政復古期における『リチャード三世』の改作——英国歴史劇の変容——」、日本英文学会九州支部第 64 回大会 シンポジウム 第 1 部門 イギリス文学 「William Shakespeare 劇の材源と改作」（於 大分大学旦野原キャンパス）、2011 年 10 月 29 日。
- ③ 杉浦裕子 「ノヴェルの女性と舞台の女性——ウィリアム・ペインターの『悦楽の宮殿』から」、日本英文学会九州支部第 64 回大会 シンポジウム 第 1 部門 イギリス文学 「William Shakespeare 劇の材源と改作」（於 大分大学旦野原キャンパス）、2011 年 10 月 29 日。
- ④ 丹羽佐紀 「‘The Moor’ から ‘Ohtello’ へ——Chinthio の作品と *Ohtello* の比較について」、日本英文学会九州支部第 64 回大会 シンポジウム 第 1 部門 イギリス文学 「William Shakespeare 劇の材源と改作」（於 大分大学旦野原キャンパス）、2011 年 10 月 29 日。
- ⑤ 小林潤司 「“Adapted to the Stage by Colley Cibber; Revised by J. P. Kemble”」、日本英文学会九州支部第 64 回大会 シンポジウム 第 1 部門 イギリス文学 「William Shakespeare 劇の材源と改作」（於 大分大学旦野原キャンパス）、2011 年 10 月 29 日。
- ⑥ 山下孝子 「“When shall I hear all through?” [*Cymbeline*, V. iv. 382]——『シンベリン』の終わり方を巡って」、日本英文学会九州支部第 64 回大会 シンポジウム 第 1 部門 イギリス文学 「William Shakespeare 劇の材源と改作」（於 大分大学旦野原キャンパス）、2011 年 10 月 29 日。
- ⑦ 大和高行 「王政復古期における『リチャード三世』の改作——英国歴史劇の変容——」、九州シェイクスピア研究会第 160 回例会（於 西南学院大学）、2011 年 10 月 8 日。
- ⑧ 大和高行 「Nicholas Rowe, *The Tragedy of Jane Shore* を読む」、第 37 回スチュアート朝研究会（於 専修大学）、2011 年 9 月 10 日。
- ⑨ 小林潤司 「書評：Robert Brustein, *The Tainted Muse: Prejudice and Presumption in Shakespeare and His Time* (Yale UP, 2009)」、関西シェイクスピア研究会例会（於 ホテルサニーストン）、2010 年 12 月 12 日。
- ⑩ 杉浦裕子 「劇場戦争前後の『お気に召すまま』と『終わりよければすべてよし』」日本英文学会九州支部第 63 回大会（於 九州大学）、2010 年 10 月 31 日。
- ⑪ 丹羽佐紀 「『ロミオとジュリエット』におけるロレンス修道士と薬屋の関係をめぐって——二人の役割の同質性とその宗教的背景——」、第 49 回シェイクスピア学会（於 福岡女学院大学）、2010 年 10 月 16 日。
- ⑫ 大和高行 「John Lacy, *Sauny the Scot* を

読む」、第 32 回スチュアート朝研究会（於専修大学）、2010 年 8 月 30 日。

⑬小林潤司「『第二の乙女の悲劇』のダブルプロット構造の再検討」、第 48 回シェイクスピア学会（於 筑波大学）、2009 年 10 月 3 日。

⑭小林潤司「『助言文芸』の衰退とトマス・ワイアットの詩：ウォーカー流『本当は怖い初期近代イギリス文学史』の検討」、鹿児島近代初期イギリス演劇研究会・宗教とテューダー朝演劇の成立研究会 合同研究会（於 鹿児島大学）、2008 年 11 月 15 日。

⑮大和高行「*Sauny the Scot* (1667) にみる新たな喜劇性について」、第 47 回シェイクスピア学会（於 岩手県立大学）、2008 年 10 月 11 日。

⑯大和高行「ジョン・レイシーの『じゃじゃ馬馴らし』—スコットランド人従者と王政復古期の家父長制」、九州シェイクスピア研究会第 148 回例会（於 九州大学）、2008 年 9 月 13 日。

⑰小林潤司「書評：Greg Walker, *Writing Under Tyranny: English Literature and Henrician Reformation* (Oxford UP, 2005)」、関西シェイクスピア研究会例会（於 大阪大学）、2008 年 4 月 27 日。

〔その他〕

ホームページ等

<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/handle/10232/8064>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大和 高行 (YAMATO TAKAYUKI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：30253371

### (2) 研究分担者

丹羽 佐紀 (NIWA SAKI)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：40244272

小林潤司 (KOBAYASHI JUNJI)

鹿児島国際大学・国際文化学部・教授

研究者番号：10258676

山下孝子 (YAMASHITA TAKAKO)

鹿児島国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：70224623

杉浦裕子 (SUGIURA YUKO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師

研究者番号：70224623